本実践・研究から見えてくること

研究協力者　三戸　範之
（秋田大学教育文化学部教育実践講座）

研究主題　自律した学習者を育てる：子どもと教師でつくる「学びのものさし」
体育科研究テーマ　自他の課題を解決する中で、運動との多様な関わり方のよさを実感する子供を育む学び
公開研究協議会単元名　マット運動　クルッと回ってピタッと止まって gymnast
オープン研修会単元名　ABCD Dynamics ！ 跳び箱運動　Active Beautiful Communication Dynamics

1　自律した学習者の実現

本年度の附属小学校における研究主題は、自律した学習者を育てる：子どもと教師でつくる「学びのものさし」である。この「自律した学習者」に必要な力としては、自らの現状を分析し目標を設定する力、多様な学習方法を身につけ選択活用する力、目標に照らし達成状況を吟味して学習方法を修正する力の 3 つがあげられている。

両授業の「単元の構想」によると、1 時間目は試しの時間とし自らの現状を分析し、2 から 5 時間目では、助言、タブレット、場の活用など多様な学習方法を活用している。6～8 時間目は、技を選択して深め発表会を行うことにより達成状況の把握と学習方法の修正を図っている。両授業は単元全体を通して、「自律した学習者」に必要な 3 つの力を育む流れになっている。

2　「学びのものさし」こつ

本年度体育科の研究では、「こつ」が重要なキーワードとなっており、出来映えを高めるための課題解決につながるこつを伝えることを「学びのものさし」の更新ととらえている。両授業では動きのこつを見付けるために、演技、タブレット端末での観察、互いの助言を活用している。役割を分担しこつを見付け伝え合うなかで、自ら課題を考え解決のために活動し、運動に積極的に取り組むことは、仲間の取り組みを認めようとする態度を醸成し、「する」、「知る」、「見る」、および「応援する」といった運動との多様な関わり方のよさを実感する子どもを育む効果が期待できる。

3　学習の手段

両授業における学習の手段としては、演技・実技練習とともに、動画の活用、助言が大きな役割を果たしている。運動学習において視覚による指導は、学習効果が高いと言われている。タブレット端末で撮影した動画は、即時的に自分の運動を確認することや、手本となる運動と比較することに活用できる。また、運動の学習初期に欠かせない、運動の全体像、粗形態の把握にも役立つと考えられる。両授業は、「技の出来栄えを高める」ためのこつを主に言語化して示しており、これを視覚的にも提示できればいっそう学習効果が高まると考えられる。

こつを伝える際には、助言やクラウド型協働学習支援ツールへの記載を活用している。言葉は、理解に個人差があるため、運動と用語の対応、定義に留意する必要があると考えられる。そのため理解を促進する工夫としてマット運動の授業では、運動経過の図とこつを示す言葉を対応させ、跳び箱運動の授業では、台上前転の運動経過を「助走」、「踏切」、「着手」、「着地」に区分してこつを示す言葉を対応させている。

運動感覚的な指導の工夫としてマット運動の授業では、側方倒立回転で足の目標位置を示すためにゴム紐を用いている。跳び箱運動の授業では、準備運動でうさぎ跳び、馬跳び、ステージを利用した運動を行い、苦手な者への対応として小さい跳び箱を台として活用している。このような下位課題の活用は、目標技能の運動感覚を簡易に身につけさせ学習効果を高めようとする工夫である。

両授業は、視覚、言語、および運動感覚的な指導を組み合わせ、いっそう運動の学習効果を高めているといえる。

4　動機付け

両授業は全体として、課題解決的学習法を用いていることに特徴がある。両授業は、自分や仲間の課題を見つけることや課題解決の方法を自ら工夫させている。これは自己決定の意識を育み、内発的動機付けを高めるために効果的であると考えられる。内発的動機付けを高めるためには、自己決定の意識とともに能力の認識が重要である。両授業でアドバイスする際に相手の良い点に触れる指導は、能力の認識を促し、内発的動機付けをいっそう高める工夫であるといえる。

以上、両授業は研究主題「自律した学習者を育てる」ことに合致しているといえる。運動との多様な関わり方、動機付け、言語活動の充実などを考慮しながら、適切な学習方略を検討する上で今後一層の研究の深まりが期待できる。

授業担当の伊藤敏幸教諭、山田幹教諭はじめ、関係の皆様のご尽力、ご努力に深く敬意を表し感謝を申し上げる。